

縁自由区

～ 圓塾 2014 年前半の歩み～

澤野さまへ

私、約10年ほど前から京都が好きで、あらゆるジャンルに興味を持ち、これまで、自分なりに楽しんできました。以前、文化検定1級合格者の集いに参加した時、誰かが「これがスタート地点で・・・」とか言っていたのですが、同感です。京都学は私の生涯学習のひとつであります。

以前は毎年顔見世を見ていたのですが、その時を思い出し、勝手に紀行文を貼付しました。もし、お気に召したら使ってください。四季折々に京都の魅力は沢山ありますが、私は、なぜか、冬の京都が一番好きです。

私の京都旅＜金閣寺ほか＞

師走。名神高速を走り片道約2時間のドライブ。今回は河原町御池に宿を取り1泊2日の京都行き。まずはお昼ごはん、ちょっと豪華に紫野にて典座料理をいただき、鹿苑寺へ。久しぶりに、金箔の舍利殿を映す鏡湖池の水面を見たいと訪れたのですが、あいにくの曇り空。しかし、焼失前の金閣をイメージするには十分。三島由紀夫や水上勉の小説を思い浮かべ、少し物哀しい雰囲気味わうことができました。ついでに、五番町遊郭跡をゆっくり通って、三条通りにある大西清右衛門美術館へ。

ぶらりと、ゆつくりと、現地で感じながら思い浮べたり、美味しいものを食べたり・・・円熟境地、おとなの遊び方ですよ！
これからも京都学の奥義を極めて下さいね♪

いつも圓塾便りの感想をお聞かせくださる

岐阜市の乾さん。

このたびは寄稿文をありがとうございます！！生涯学習のフィールドとして、京都を満喫されている様子がとても伝わってきます☆

観覧券とともに抹茶も購入。居住い正して美しい主菓子と薄茶を頂戴してから、素晴らしい作品の数々を拝見しました。夕食後、ひとりで左京区高野にある小さなジャズ喫茶へ。ライブを聴きながらお酒を飲み、賑やかな打ち上げにも参加させていただきました。翌朝、小雨にもかかわらず鴨川沿いを通り糺の森まで往復、参拝を兼ねてのスロージョギング。漱石の句碑も拝見。ここからどんな思いで川向の「大友」を眺めたものかと切ない思いを連想。部屋に戻りシャワーを浴びてから美味しい朝ごはんをいただきました。車には着替えやら雨具など、何でも積んでありますから悪天候でも大丈夫。そして、ぶらり木屋町散歩で四条南座の顔見世昼公演へ。ちゃっかり着物まで持参した人と一緒です。ひょっとして何処かの花街総見にあればと密かに期待していましたが、これは欲張りでした。夜の高速道路は苦手につき、明るいうちに帰路へ。お土産はおしゃれなカネール（聖護院八ツ橋）にしました。今回は公演後に、いづうの鯛寿司と雀寿司を半分づつ食べようか、そして、亀屋伊織の干菓子も絶対に予約しようなどと、翌年の顔見世を楽しみにしつつ無事に帰宅できました。

「顔見世を見るため稼ぎ溜めしとか 虚子」
〔岐阜市 乾 茂行〕

二〇一四年前半の圓塾は、さあくる講座「京都ね歩きは歩り〜東寺の密教体現〜」からスタート！大伽藍の世界遺産を隅々まで皆さんとネホリハホリと満喫。三月には「秦氏をめぐる」で卒園式。

四月からの圓塾さあくる講座は新シリーズ「洛外放浪譚」。京の都の六つの洛外物語。第一話「いわくらの岩倉」と第二話「ながおか古京」では、今は静かな住宅街で、時を越え・・・宮殿や原始信仰に想いを馳せました。



コープカルチャーでは、「祇園異界迷宮」にはじまり、「千本鳥居の道」「糺の森・下鴨神社」「中山観音」「葵祭鑑賞会」「京の黒田官兵衛」「琵琶湖疎水・青年の挑戦」「足は身体を支える要！セルフフットケア」その他、日本色彩言語カラフルカラー協会親子色彩教室では、「自然の恵みイッパイ！虹色探検」などなど・・・子供から大人まで、様々な文化や健康をテーマに、楽しくご案内させて頂きました☆

和く話く対談 第二弾

今年も祇園祭のシーズンとなりました。毎年圓塾祇園祭の宴は大勢お越し頂き感謝しています。そこで、今回の圓塾便りの対談コーナーには、公益財団法人祇園祭山鉾連合会副理事長岸本吉博氏にご足労頂き、祇園祭よもやま話「オフシャルでは云いにくい事も重々承知の上で」をお願い致しました。

ズバリお伺いします。今年の祇園祭は大きく様変わりするようですが、どう変わるのでしょうか？

約一年前から広報等でお知らせしているように、今年からお祭が前祭（さきまつり）と後祭（あとまつり）の二つに分かれます。八坂神社の神幸祭（七／一七）と還幸祭（七／二四）に合わせて、一七日に前祭の山鉾巡行、二四日に後祭の山鉾巡行が行われます。

話は遡りますが、今から四十九年前、当時の京都市の交通事情や観光政策、それに拡張された御池通を京都のシンボル道路にするといった道路行政上の要請から時の市長が山鉾風流（フリュウ）と読みます。祭の運営儀礼の（総称）を大胆に変更し、前祭と後祭を統合しました。勿論大きな反対もあって、一部の山鉾が巡行不参加を断行するまでになりました。ここに前祭山鉾町と後祭山鉾町との大きな断絶関係が生じ、祇園祭の支え手のぬぐえないオリとなって久しくなりました。

何故、この時機に後祭復活の気運が現実化したのでしょうか？

この半世紀間で、お祭を支える環境が大きく様変わりしました。特に山鉾を擁立する町衆の世代交代は著しく、往時と現在を比べると実に8割以上の町衆がお祭のしきたりを全く知らない新しい人に変わってしまいました。

丁度3年前に、この変化に危機感を抱いた町衆から「もう一度、本来の神事に戻すなら最後のチャンスである」と、強い要請があり、学者文化人、各町保存会、山鉾連合会の大所高所からの判断で、今年が変更の最終期限と決定し、二〇〇〇年統一されたお祭を、本来の形に戻す運びになりました。ややもすると前祭が祇園祭であるように感じていますが、二〇〇〇年の歴史からするならば、現在までの五〇余年間が合同催行されていただけで、圧倒的に長い間、前・後祭が蕭々と順序良く行われて来たのです。そう考えると、変わるのではなく、本来のカタチに戻ることに過ぎないのでは？

素人からすれば、お祭が二度あることは嬉しいことですが、主催者側からするとプラス面マイナス面色々あると思います。各々一件ずつ聞かせてもらえますか？

プラス面からお話ししましょう。保守的にとられますが、私見を交えて申しますと、本来の神事の有り様に戻すこととは、お祭の歴史と伝統を本流に乗せることに通じるので、大変意義深いことです。これが芯でないとけないと思うのです。いかに時代の流れとはいえ、神事が容寄せパンダ役を担う必要はないと思います。

マイナス面では、本来の神事とはいえ、お祭を催行・維持するには莫大な費用がかかります。祇園祭クラスだと行政からの助成金がかかりあるはずと思われがちですが、お祭は神事ですから、お祭に直接力が出せる訳がありません。これがため、山鉾町が負担する人的・経済的負担が合同催行と比べて格段に大きくなります。また行政のタテ割り政策から、カユイところに手が届く様な助成金投入が出来ませんので、よほど上手な費用の交通整理が出来ない限り、経済破綻をきたしかねない状況にあるといっても過言ではありません。

マクロ視点からの質問です。これから先、二二世紀を見据えて、岸本副理事長は祇園祭催行のビジョンをどう描かれますか？

ちよつと期待に添えないような答えになるのですが、私の持論ですからお話します。前問の答えにも絡みますが、お祭の有り様は絶対不変でなければ駄目だと思っております。だからビジョンと問われれば、決して時代に対応してはならないのです。「例年通りやって行きましょう」の繰り返しが、永遠に続くことこそが私の描く祇園祭の将来ビジョンです。

ミクロ視点からのお願いです。お祭催行の玄人であるお立場から、是非祇園祭では、「ここを見ておくと良いよ」という一言アドバイスをいただけませんか？

ひとつと言われれば、屏風祭の鑑賞に尽きると思います。山鉾町の中でも山を保存している町家の個人宅がその家独特のしつらえをして、来訪者をもてなします。一軒だけの屏風祭を覗くのではなく、数軒見回って下さい。そしてそこにいる係の人に色々尋ねてみて下さい。しつらえの意味を質問されると迷惑する人はいません。一生懸命説明してくれると思います。ここに生じるコミュニケーションこそが、祇園祭の機軸に流れるおもてなしの醍醐味だと思います。

今年の祇園祭では、町衆とのコミュニケーションを豊かにして、新たなお祭の魅力を増進しようと思えます。ご多忙の中、どうもありがとうございます。



公益財団法人祇園祭山鉾連合会 副理事長岸本吉博氏